

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的に傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には《珠玉の短篇》という言葉にみられるように短篇としての独特の良画があり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1984年3月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に上映を開始し、午後4時より開映致します。

一般 300円・学生 200円・小人 150円

4月7日(土) 午後4時開映
—瀬尾光世と政岡憲三のアニメ—

桃太郎の海の神兵

松竹1944年作品

製作=松竹动画研究所 後援=海軍省
構成=熊木喜一郎 脚本・演出=瀬尾光世
影絵=政岡憲三 挿話=小出正吾
(「東印度童話集」より) 音楽監督=小関裕而
作詩=サトウハチロー 演奏=大東交響楽団、松竹軽音楽団 合唱=ニッタク合唱団 白黒・74分

* * *

本特集では1982年11月に政岡憲三、83年3月に瀬尾光世と、それぞれのアニメーション選集を企画したが、今回は、その両者が組んだ長篇アニメ、「海の神兵」を上映する。この作品は《松竹七十年史》に「桃太郎の神兵」と記載されているものだが、実際はフィルムに「海の神兵」というタイトルのみが書かれている。瀬尾が1942年に製作した「桃太郎の海鷲」の姉妹篇とも言うべき戦意高揚アニメで、桃太郎の鬼退治の童話をベースにして、桃太郎とその家来達を日本軍に、鬼を連合軍にみたてている。巻頭に「メナド降下作戦に参加せる海軍落下傘部隊将士の談話による」と記されており、実際の戦闘に想を得て日本軍の活躍を描いている。海軍省の後援を受け、スタッフ50名、製作費27万円という破格の大作アニメとして昭和19年12月に完成をみた(20年3月完成、同年4月12日白封切という説もある)。文字通り《鬼畜米英》といった内容であるためか、この映画は終戦直後焼却されたとされ、長い間《幻の傑作アニメ》と言い伝えられて来たが、松竹大船の倉庫でネガの残存が確認され、今回プリントを焼くことができた。戦後の上映はこれが最初となる。6巻説と9巻説があったが、現像されたものは9巻(ただし、1巻毎のフィート数は普通より少なめ)で、第1巻、2巻が国内を、3〜9巻が南方の島を描いている。抒情的な国内部分の背景を黒崎義介が、ダイナミックな南方シーンの背景を田中武重がそれぞれ担当した。第5巻は南方の原住民(ここでは様々な動物)に日本語を教えるエピソードを扱っているが、そこに使われるのが有名な主題歌「アイウエオの歌」である。小関裕而の音楽が漸層的な構成で効果を高めている。クレジットに《主題歌・ニッタク》という名称が見えるが、これは外国語の使用を禁じられたため、昭和17年8月以降、コロムビアというレコード・レーベルをニッタクに改めたからである。桃太郎の鬼ヶ島征伐(米軍への攻撃)を《神兵による南方被抑圧民族の解放》として正当化するための逸話部分(第7巻)は美しい影絵アニメで描かれており、これを担当したのは政岡憲三である。

5月12日(土) 午後4時開映
—ジガ・ヴェルトフ選集(2)—

これがロシアだ (カメラを持った男)

Chelovek S Kinoapparatom

ソ連：VUFKU 1929年作品

監督・脚本・編集=ジガ・ヴェルトフ
撮影=ミハイル・カウフマン 助手=エリザヴェータ・スヴィーロワ
無声・白黒・67分 無字幕映画

* * *

「第十一年」(’28)に次ぐこの「これがロシアだ」は、ジガ・ヴェルトフ最後の無声長篇であり、スローモーション、逆回転撮影、スティール・ピクチュア、多重焼付け等の活用でサイレント芸術の様々な可能性を試みようとした意欲的実験作であり、近年ますますその声価を高めているものである。とりわけ、カメラマン(カウフマン)を被写体として登場させる異化的方法は現在もお新鮮である。しかし、製作中カウフマンはヴェルトフと意見の相違をきたし、兄のもとを離れた30年に「春」を作ることになったとも言われている。ヴェルトフのアヴァンギャルド精神は、この映画を機に形式主義的であるとの批判を受けるようになる。日本でも和田山滋が「ドキュメンタリズムは次第に平凡な形式主義に墮して行く。(略)ジガ・ヴェルトフは、カメラを持っただけでなく、カメラを弄ぶ男である」と書いている。ヴァルター・ルトマンの『伯林—大都会交響楽』(’27)のモスクワ版であるとの見方もあるが、サドゥールによれば『伯林…』の方は、むしろカウフマンが24年に作った「モスクワ」に刺激を受けているという。モスクワでは1929年1月にプレミア上映され、アメリカでは同年5月にフィルム・ギルド・シネマ劇場で公開されている。ニューヨーク・タイムズはアメリカの観客が拍手をもってこの作品を迎えたと報じている。日本では1932年3月10日に武蔵野館と日本館で「生存の闘争」(ウラディミール・コロレヴィッチ監督、1928年)と共に本邦初のヴェルトフ映画として封切られた。公開当時からこの作品は原名の「カメラを持った男」で呼ばれることが多く、現在ではこちらが通称名としてよく使われる。事情はアメリカでも似ており、原名訳の他に、“Moscov Today” “Living Russia or the Man with the Camera” 等の題名がある。製作はVUFKU(全ウクライナ写真映画企業)となっているが、ソユーズキノ映画、ソヴキノ映画とする資料もある。スタッフは弟のミハイル・カウフマン、妻のエリザヴェータ・スヴィーロワという身内ばかりであるが、他にベリアコフ、ゾトフというカメラマンが参加しているとも言われる。ヴェルトフの奔放な才能は、ゴダールをはじめとする今日の映画人たちにも影響を与え続けている。

6月2日(土) 午後4時開映
—ロバート・フラハティ選集(2)—

ルイジアナ物語

Louisiana Story

米：ロバート・フィルムズ1948年作品
製作・監督=ロバート・フラハティ 製作協力=リチャード・リーコック、ヘレン・ヴァン・ドンゲン 脚本=ロバート・フラハティ、フランシス・フラハティ
撮影=リチャード・リーコック 編集=ヘレン・ヴァン・ドンゲン 音楽=ヴァーゼル・トムスン 演奏=フィラデルフィア交響楽団 指揮=ユーージン・オーマン
録音 音楽=ベンジャミン・ドニガ
音楽録音=ボブ・フェイン 編集助手=ラルフ・ローゼンブルム 出演者=ジョゼフ・ブードロー(少年)、ライオネル・ルブラン(父)、E・ビアンヴェニュー(母)、フランク・ハーディ(ドリラー)、C・P・ゲドリ(ポイラーマン)
白黒・日本版字幕・75分 日本未公開

* * *

イギリスからアメリカへ戻った“The Land”(’42)を監督したフラハティが6年ぶりに発表したこの作品は、結局彼の遺作長篇ということになる。製作はロバート・フィルムズまたはフラハティ・プロとされているが、実際に25万8千ドルを出資したのはニュージャージー州のスタンダード・オイル社であるらしい。アメリカでは’48年9月にニューヨークのサットン劇場で封切られたが、日本では一般公開されず、米国広報文化局(USIS)映画としてG・H・Qの民間情報局(CIE)が各地の上映にプリントを提供した。スタッフはフラハティの妻フランシスをはじめ、H・ヴァン・ドンゲン、R・リーコック、V・トムスン等、いづれもドキュメンタリー映画史上の重要人物ばかりである。演奏をオスマンディ=フィラデルフィアが担当しているのも興味深い。低湿度プティ・アンス・バイユーに住むカジュン(アカディア人。カナダからルイジアナ州へ移住したフランス系の人々)の少年アレクサンダー・ナポリオン・ユリシニア・ラトゥールの目を通して、自然と文明の遭遇、葛藤、調和のテーマが詩情豊かに描出される。「極北の怪異」から「ルイジアナ物語」まで30年近い年月を経ているが、前者のアザシ、カヌー、犬、レコード等が、後者の鰐、小舟、アライグマ、デリック(油井機)等に対応している点も、フラハティの作家性を知るのに有効であろう。’52年の《サイト&サウンド誌・映画史上のトップテン》では第5位にランクされた名作であるが、今回上映するプリントは日本版で多少短縮の可能性もある。その監督である深尾修造は松竹、新興を経て’42年に劇映画の監督を引退し、’49年6月に世を去っている。尚、出演者は全て素人である。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には《珠玉の短篇》という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に出札を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名(座席数204)に達し次第入館を締め切ります。

1984年7月 フィルムセンター

一般 300円・学生 200円・小人 150円

7月7日(土) 午後4時開映

—G・ヤコベッティ 選集(1)—

世界残酷物語 Mondo Cane

イタリア：チネリツ1961年作品
製作＝ガエルティエロ・ヤコベッティ、
パオロ・カヴァーラ、フランコ・プロス
監督＝G・ヤコベッティ 撮影＝
アントニオ・クリマーティ、ベニート・
ブラッターリ 音楽＝ニーノ・オリヴィ
エロ、リズ・オルトラニ 編集・解説
執筆＝G・ヤコベッティ 日本版語り手
＝小沢栄太郎

カラー 103分

* * *

ガエルティエロ・ヤコベッティ(1919年9月生れ)は、ジャーナリストからドキュメンタリーの監督に転じ、この「世界残酷物語」を長篇第1作として発表した。「世界残酷物語」は地球上の様々な〈残酷の生態〉を〈残酷な視点〉で取材しようとする露悪的な方法の上に立てられており、世界中で大ヒットするとともに、多くの批難を浴びた。その批難は、この作品のドキュメンタリー手法が無思想であること、商業主義的であること、対象に対して作為が働いていることといった点に集約される場合が多かった。〈良識的〉、〈思想的〉な批難の思惑にもかかわらず、ヤコベッティはその後、「世界女族物語」(63)、「続・世界残酷物語」(64)、「さらばアフリカ」(65)、「ヤコベッティの残酷大陸」(71)、「ヤコベッティの大残酷」(75)等を続々と発表し、それぞれヒットさせている。その作品がそれとともに〈作為的〉になり、アクションの要素を積極的に取り入れるのも興味深い。ヤコベッティの影響で、この種の〈きわものドキュメンタリー〉はイタリア娯楽映画の特異な分野の一つとなり得て今日に至っている。〈無思想〉〈商業的〉〈作為的〉であっても、それがドキュメンタリーという映画の手法の強力さを世に知らしめた事実是否定できない。日本題名通り、世界中にロケし、南イタリアのヴァレンチノの肖像除幕式に始まって、ニューヨークのロッソ・ブラッツィ、南洋民族のボーイ・ハント、文明国のマンハント、豚に人間の乳を与えるニューギニアの民族、同じくその5年に一度の肉食祭、ロサンゼルス郊外の動物墓地、台北の大食レストラン、ローマのヒョコ染め分け、日本の松坂のビールを飲む牛、タバル島の美人の基準等々……と描いていく。この映画で記憶に残るのは、残酷で赤裸々な映像と対照的な美しいバラードの主題歌、「モア」である。グラミー賞を受賞したほか、世界中の多くの歌手が唄って大ヒットとなった。尚、原題名は直訳すれば〈犬の世界〉となる。

8月4日(土) 午後4時開映

—亀井文夫 選集(2)—

世界は恐怖する 死の灰の正体

日本ドキュメント・フィルム社＝三映社
1957年作品

製作＝大野忠、井上猛夫 監督＝亀井文夫
助監督＝勅使河原宏、小山内治夫
撮影＝菊地周、藤井良孝、白田純一、西
堀美知江 音楽＝長沢勝後 照明＝久米
光男、青木利夫 録音＝大橋鉄矢、奥山
重之助 編集＝守随房子 効果＝大野松
雄 進行＝藤沢恵治 協力＝山崎文男
(科学研究所)、道家忠義(立教大学)、
斎藤信房、宮川正、清水健太郎(東京大
学)、三宅泰雄(気象研究所)、江川友
治(農業技術研究所)、山泉登(群馬大
学)、渡辺漸、田淵昭(広島大学)、三
村卓雄(東京大学)、林一郎(長崎
医科大学)、広島原爆病院他多数 「原
爆の凶」＝丸木位里、丸木俊子

白黒 81分

* * *

フィルムセンターは、1982年5月に《亀井文夫選集》と題して、亀井監督の戦前・戦中作品、「上海」と「小林一茶」を上映したが、今回は戦後の作品、「世界は恐怖する」を上映する。この作品は副題に「死の灰の正体」とあるように原爆問題を扱ったものである。亀井は戦前戦後を通じて自由主義者、ヒューマニストであることを貫いたが、それはこの映画を見ても明らかである。戦後、東宝争議を経てフリーになり、1954年には日本ドキュメント・フィルム社を設立して記録映画製作に打ち込んだ。「世界は恐怖する」は三映社の配給で57年11月に公開され衝撃を与えたが、その前年5月に上映された「生きていてよかった」もまた原水爆禁止を訴えた作品として高い評価を得ていた。亀井が核兵器を激しく糾弾する作品をほぼ連続して発表した背景には、1954年3月にアメリカがビキニ環礁付近で行なった水爆実験とそれに伴う第五福竜丸事件があったと想像される。「世界は恐怖する」は、57年度キネマ旬報ベスト・テンでは日本映画部門として抜かれており、他の劇映画に伍して第16位に入っている。ちなみにこの年の日本映画では、第1位、2位に今井正作品、「米」、「純愛物語」が入っている。その「純愛物語」もまた原爆の残酷さを物語りに取り入れている。この作品で亀井は一貫して極めて冷静な態度で〈核兵器の脅威〉を暴いていく。日本中の大学、研究所等に取材して、放射能の恐怖の実態を科学的、実証的に積み重ね、描いていく。冷静で科学的なだけに、観る者の驚きも大きい。尚、捜入される《原爆の凶》の丸木夫妻は、〈水俣の凶〉、〈おきなわ戦の凶〉等でも知られている。

9月1日(土) 午後4時開映

—チャップリン・チャップリン選集(2)—

チャップリンの替玉 The Floorwalker

アメリカ：ミュージュアル社1916年作品
脚本・監督＝チャールズ・チャップリン
撮影＝ローランド・トサロー、ウィリア
ム・C・フォスター(脚本・監督・撮影
のクレジットは以下全て同じ) 出演
者＝C・チャップリン(デパートの店員)
E・パーヴィアンス(美人の秘書)、E
・キャンベル(マネージャー)、L・ペ
ーコン(売場主任)、A・オースティン
(売り子)、S・ミュー(女刑事)、L
・ホワイト(客) 無声・白黒・20分

チャップリンの消防夫 The Fireman

アメリカ：ミュージュアル社1916年作品
出演者＝C・チャップリン(消防夫)、
E・パーヴィアンス(若い娘)、L・ペ
ーコン(彼女の父親)、E・キャンベル
(消防署長)、L・ホワイト(火事を出
した家の主人) 無声・白黒・20分

チャップリンの大酔 One A. M.

アメリカ：ミュージュアル社1916年作品
出演者＝C・チャップリン(夜遊びする
男)、A・オースティン(タクシーの運
転手) 無声・白黒・17分

チャップリンの番頭 The Pawnshop

アメリカ：ミュージュアル社1916年作品
出演者＝C・チャップリン(質屋の店員)
E・パーヴィアンス(質屋の娘)、H・
バーグマン(質屋の主人)、J・ランド
(質屋の店員)、A・オースティン(時
計を持ってきた男)、E・キャンベル(悪
漢) 無声・白黒・20分

チャップリンの舞台裏 Behind the Screen

アメリカ：ミュージュアル社1916年作品
出演者＝C・チャップリン(小道具係)
E・パーヴィアンス(その助手)、E・
キャンベル(小道具係の親方)、H・バ
ーグマン(歴史劇映画の監督)、L・ペ
ーコン(喜劇映画の監督)、J・T・ケ
リー(撮影技師) 無声・白黒・20分

* * *

本年1月に上映した同選集(1)では、チャップリンのエッサネイ社作品4本を取り上げたが、今回の番組は全て1916年に作られたミュージュアル社作品である。「替玉」はミュージュアルへ移籍した第1作。以下それぞれ第2作、第4作、第6作、第7作にあたる。16年の中頃、破格の待遇でミュージュアルと契約し、1年間に12本の作品を発表したチャップリンは、18年にはファースト・ナショナル社へ移った。